

その13 駒井家住宅に学ぶ

木林学 きりん の の フォトメ

中川 典子

「家が統々建って花畑が滅びても、今のところではなお飽くばかりの田園味がのこっている。(中略)それだからどこへ旅しても北白川に帰らねば落ち着かぬ。」昭和四年九月十日付、大阪朝日新聞」とは、京都帝国大学理学部教授、駒井卓博士の記述です。彼が、そこまで愛おむ北白川の我が家こそ、近代の一般住宅における代表的な洋風建築、駒井家住宅。

（京都市指定有形文化財・財団法 人日本ナショナルトラスト保護資産）なのです。



自然の恵みを生かす

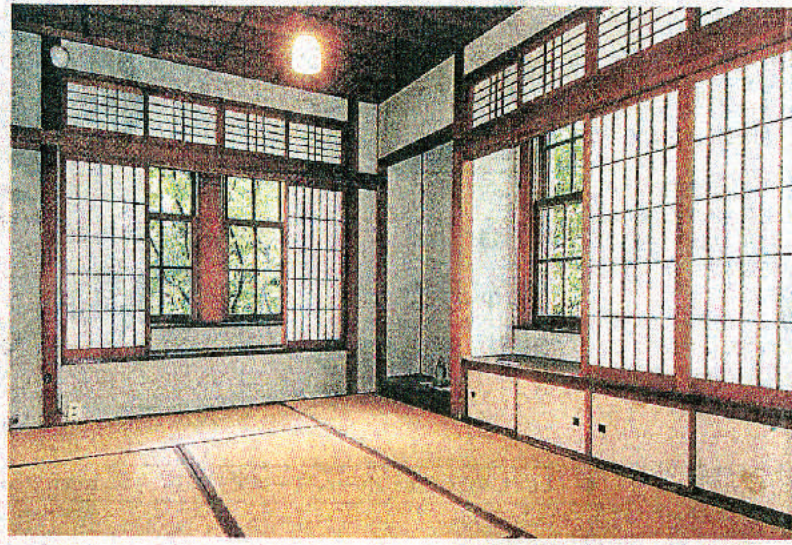
玄関を一步入れれば、光差し込むスパニッシュを基調とした半出アールチのある窓、そして緩やかな階段。日本人にとって、この滑らかな曲線を描く階段は、未知のテザ

インであり、新しい様式だったと思えます。この木造階段の傾し出す色艶、光を帯びた立体感、そして階高を低くする工夫など、恵みの居場所をつくると言われた米国人建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリスの設計です。



（銘木業員監）

次回は7月14日に掲載予定。



モダンな洋館内の和室には、さまざまな土音がこぼれている



ウィリアム・メレル・ヴォーリスが設計した駒井家住宅。円熟期に手がけられた昭和初期の代表的な住宅建築（京都市左京区北白川）



駒井卓・静江夫妻（駒井家所蔵）



玄関脇の隠し引き出しには靴磨きセットが…



玄関を一步入れれば、緩やかな階段が二階へと誘う



使い勝手の良さや意匠

駒井家住宅は、今から八十年前の建物。一般の中流住宅ながら、近代化する時代を感じさせます。

和風の西洋家具

私たちが使いたまわれた引き出しに、この家の一部だったのだと感心します。特に、私が気に入ったのが、玄関脇にある靴磨き道具の収納。靴の生活となり、靴磨きこそ毎日の日課でしょうか、欠かせない道具を壁の中木（壁と床の見切り材、壁の保護材）に隠し引き出しとしてあり、小粋な西洋家具にホロリとさせられます。駒井夫妻の暮しが今もなお、息づいているような使い勝手の良さや意匠が見られ、木のある暮らしの豊かさを実感しました。

【七】 駒井家住宅は京都市左京区北白川伊織町8075（724）3115。毎週、金・土曜のみ一般公開。受け付けは午前10時～午後3時まで。入館料は大人五百円、中高生二百円。